

中国結びの社会文化的意味

(静岡県立大学) 余 項科

図 1



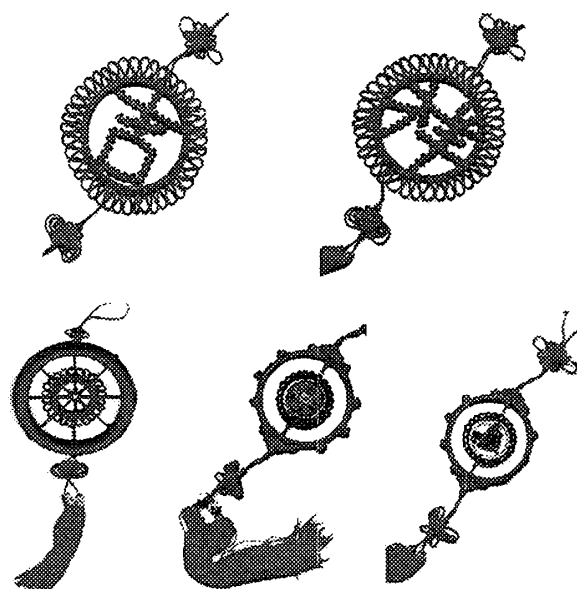
Chinese Macramé
The Ties That Bind

I. 中国結びとその流行

図 1⁽¹⁾はいわゆる中国結びの一つである。一見して、怪物のように糸が曲がって入り組んだその様子はいかにも複雑そうに見えるが、見つめると、意外に幾何学的に規則正しく形が整っておりバランス感覚がよい工芸美術品となっている。

街をそぞろ歩くとき、往来が激しくにぎやかな人の群れのなかに、多くの人、とりわけ若者や女性が髪の毛、肩、胸、腕や腰などに中国結をつけているのを発見できる。いや、田舎に行っても、同じ光景が目映るに違いない。また図 2⁽²⁾のよ

図 2



うな中国結は室用の飾り物としてよく車のバックミラーおよびフロント、一般家庭や会社でもその部屋に飾られている。これらはこれまで流行していた爆竹の飾り物に優る、たいへんおめでたい雰囲気満ち溢れている。

実は、中国結びは20世紀70年代半ばまで単に縄結びとして知られていた。1976年、台湾漢聲雜誌社は英文版の“ECHO”誌第6巻2, 3期で初めて中国の伝統的縄結びを紹介したが、中国結びという名は1981年1月に陳夏生の『中国結』という最初の専門書が出版されたことによって知られた。のちに内外の展示会などを通じて、中国結びは台湾のみならず、東南アジア、アメリカ、ドイツ、フランスなど欧米社会を風靡していった⁽³⁾。

いわゆる中国結びとは、縄を通例幾何学模様にした中国民間工芸美術の一つである。これは通常漢語で「ゾングォジェ」と読まれ、英語で Chinese Macrameまたは Chinese Knotting と呼ばれて

いる。縄で結ぶという意味では、日本語ではこれを「中国結び（以下、中国結と省略）」と呼んでよかろう。その紐や縄は赤色と黄色がよく見られるものの、ピンクやブルーやグリーンなども使われている。現在、中国結の基本結は14種になっている。それは双銭結（淡路結び）、双聯結（こま結び）、卍字結（総角結び）、十字結（叶結び）、酢漿草結（几帳結び）、吉祥結（菊結び）、鈕扣結（玉結び）、盤長結（玉房結び）、団錦結（錦結び）、藻井結（国結び）、平結（むかで結び）、星辰結（星結び）、攀縁結（縁付け結び）、綬帯結といったものである⁽⁴⁾。

こうした基本結がさらに応用されており、多彩多様な「変化結」が見られている。それは「字結」、「服飾結」、「装飾結」、「盤扣結」といったように、分類されている⁽⁵⁾。また現在、これらの基本結は西洋結と組み合わせるものも数多く見られている。実は数年前に流行ったミサンガは「平結」、「斜捲結」などの西洋結と組み合わせたものである。こういった中国結は言うまでもなく、極めて高い鑑賞の価値を有している。さらには中国結という糸の結びかたをデザインし、玉などとアレンジすることによって、ネックレス、ピアス、カフス、バレッタ、コースター、ブレスレット、携帯ストラップ、髪留めゴムなどアクセサリができています。そのなか、携帯ストラップだけでも、中国結編のほかに、結ばれたアクセサリによって、動物編、水晶編、人形編、漢字編、花編、植物編、吉祥編などに分類されている。図3⁽⁶⁾のような携帯ストラップは実に多彩多様で、たいへん綺麗なのである。

2000年に都会ではもちろんのこと、農村の郷鎮でも、殆どのデパートには中国結の専門店や専門コーナーが設けられていた。また観光地や駅の近辺の商店街にもよく見られる。路上で道ゆく人に売り付ける個人もよく見られる。さらに業者は元旦や春節や端午節などその他の祝日・祭日に合わ

図3



せて、大量に仕入れて、威勢のよい特別セール・キャンペーンを行うのである。その値段は人民元で安いものは2,3元、つまり日本円30円ぐらいである。2001年末、筆者が北京で中国結を調査した頃、西単のデパートは「10元3様任意選」（10元3個大安売り）という看板をかけている。もちろん、特大または特注の場合、別途となるが、高級デパートで扱うものは一般の店より数倍も高い。実は、最近、日本においても、中国結が売り出されている。もっとも人気でよく売れるのはやっぱり小物、とりわけ携帯ストラップである。その値を見ると、玉石ストラップは600円、水晶の場合、一個なんと1,200円~1,500円もする。

いずれにせよ、中国結は精巧で美しく、値段も安く、また装飾性と実用性を兼ね備えているため、人々に愛用されている。それは商品という形で市場を通して迅速に広く社会の隅々まで浸透してゆき、大衆文化の一形態として現代中国社会に影響を与えている。

II. その文化史的諸関連形態

実際、上古時代、結びは日常生活に欠かせなかった。狩猟は決して単なる石や矛などの鈍器だけではなくて、また縄で結んだ網をも使って行なわれた。獲物も縄で結ばれて持ち帰られたのである。そして縄結びを用いる祭事やパレードは現代にも見られる。早くも周代に縄の結は「綬帯」に用い

られ始めた。いわゆる「綬」は昔、礼装のくみひもであって、漢以後に印璽を帯びるのに用いて、これを印綬という。そして「綬帶」は権力・権威を象徴し、官職を辞めることを「綬を解く」という。これは「腰間双綺帶」という南北朝梁武帝の歌からも伺われる。唐の「披帛結綬」や宋の「玉環綬」などもその例である⁽⁷⁾。現在でも名誉のシンボルとして綬がよく表彰に使われている。要するに、縄結は名誉、尊厳を象徴する綬帶に用いて役割を果たしてきたのである。

本来、結びは「女紅」つまり女の仕事、とりわけ裁縫の重要な一部をなしたのである。そのため、日常生活的な結びもよく見られた。『隋書』によると、皇太子だった楊廣が「同心結」を用いて宣華夫人陳氏に愛を告白したのである⁽⁸⁾。明清に至って、結びは純粋的美の表現としてより多彩多様になり、日常生活のなかに浸透していった。「盤長結」と呼ばれた結びは末永く愛し合うという意味をもつため、昔から新婚夫婦のベッドによく飾られていた。服のボタンや女性の髪留や財布などの袋物、扇子、剣などに下げる飾りに多く用いられていた。チャイナドレスのボタンこそが典型的なくみひもである。図4⁽⁹⁾は中国古典神話小説『白蛇伝』の白娘である。白娘の腰と腕、そして剣に下げているのは、縄結だったのである。

また結は中国文学史上においても重要な位置を占めている。「結」を題材にする詩が数多く残されている。「親はその縞を結び、九十その儀」という『詩経』の詩は母親がお嫁に行く娘にひもをくくりながら、婚礼儀式を教えることを物語っている。「結」は戦国屈原『楚辞』、晋の劉伶『青い川端草編』、唐の孟郊が『結愛』などその他の詩でキーワードとなったのである。唐の詩人孟郊の『結愛』がその典型であろう。

心心復心心，結愛務在深。

一度欲別離，千回結衣襟。

結妾独守志，結君早帰意。

図4



始知結衣裳，不如結心腸。

坐結行亦結，結尽百年月。

すなわち、心の結び合いはいつも深い愛情を伴う。たった一回の別れでも、何度も何度も服のすそを結んでも思慕の情が湧き出てくる。愛する人の帰りを待つ女人こそがその篤い志を、衣裳より心に託する方が良いことを知っている。どこでもいつでも結び合い続ける、と。

さらには、「結」は文字学領域においても、凝集力、協和を表し、中国語のなかで大きな語族をもっている。たとえば、結合、結社、結縁、結婚、団結、結果、結論、結束、結局などがそれである。結義・結拜（交わりを結んで兄弟分になる）や結盟や結社や団結などは求心力、凝集力、信頼性の意味をもち、婚姻関係を表すものには、結合、結婚、結親（親戚関係を結ぶ・縁組する）、結発（髪を結い夫婦となる）などがある。物事は始まりがあれば、終わり・実りもある。だから結果、結束、結局などはそれを表現する言葉である。言わば、文字は中国固有の信念や価値観や習慣を反映するシンボルに鋳型、つまりパターンを与えて

いる。

このように、結びは、名誉、尊厳、美を表現し、さらにまた愛情、団欒、親密感、凝集性という美的感覚と協和的バランス感覚に富んだ意味空間とつながっている。

Ⅲ. その原点

現在、見られる古い中国結は清時代の原物ではない。中国結がいったいどの時代に現われ始めたのかを極めるのは至難なのである。しかし、陶器や青銅器や衣類などその他の出土文物の紋様や古代絵画からその原形を探るならば、意外にも遥かに新石器時代の仰韶文化、つまり7000年前に遡ることができる。人面魚罔紋や罔紋をその原形として捉えても、無理ではなかろう⁽⁹⁾。問題は、そうした紋様は何を意味するのかにある。そもそも中国結は縄によって造られたのである。この意味では、中国結を考察する際、そのキー・ポイントは他ならぬ縄なのである。さしあたり、中国結の原点の検討は縄から出発しよう。

縄については、中国のもっとも古い書物たる『易』に書かれている。よく知られているように、『易』は周 (B.C.12~B.C.3)、商 (B.C.18~B.C.12)、夏 (B.C.23~B.C.18) にまで遡るほど古い。『易』は、「上古は縄を結びて治める、後世は聖人が書契を以ってこれを易す」と記載している⁽¹⁰⁾。一般的解釈では、ここでの「縄」が物事を記述する道具・手段とされている。実際、上古時代において、「縄」という文字符号は「物事を記述する道具・手段」とされる以前に、むしろ本源的には「法則性」という意味合いが濃厚だったのである。伝説時代における三皇五帝、とりわけ伏羲が八卦を作り天下の法則を成したのである。すなわち「始めて八卦を作り、以って神明の徳を通じ、以って万物の情を類ず、縄を結びて綱を為す」という⁽¹¹⁾。この意味から見れば、縄は「縄墨 (すみなわ) の意があり、それより度る・法る、戒める・正すと訓す

る」という白川静の解釈は肯くことができる⁽¹³⁾。この意味では、『易』における「縄」は、先史時代ないし伝説時代という「上古」において、他者を巻き込む場合の秩序意識、絆、準則、法律、強制という現代の言葉に置き換えても、おかしくはない。現代中国においても、基準や標準やよりどころを「準縄」という言葉で表現している。また『易』は『易経』とも言い、「経」という字はもともと織物の縦糸を意味し、それからすじみち、道の意味になったのである。よりの確に言えば、人の生きる道、天下国家を治める道、ひいては宇宙の奥にひそみ、宇宙を動かしている道、それを説き明かしたのが「経」である。簡潔に言うならば、それはあらゆる真理の源泉とされたのである。要するに、そもそも縄は「経」と同じ意味を持ち、人間関係を律する神聖たる公正さ、道義性、法則性と観念化されたものだったのである。

古代中国における縄の神聖性は宗教的次元から見出すことができる。女媧は伝説時代の神として、泥をこねて人間を造ったという一般説⁽¹⁴⁾がある。これは「女媧は泥中に縄を引たし、挙げて以って人を為す」という説に基づくものである⁽¹⁵⁾。文字通り、ここにおける「縄」は女媧という神が人間を造る神聖なるものである。言い換えれば、「縄」は先史ないし伝説時代の中国における崇拜物にほかならない。さらに龍は中国人の化身である。龍神の形は縄の結びの変化によって体現されると言われている⁽¹⁶⁾。言うならば、古代中国において、縄は諸神に係わる神器であると考えてよさそう。

実は、日本においても、縄は深く宗教に係わっている。たとえば、「尻久米縄」という縄は古事記に記されており、しめなわの始まりとされている。もともと、しめなわは1区域を画するための象徴的な表示で、それによって一種の神聖な性質が付与されていた。言い換えれば、清浄・神聖な場所はしめなわを引き渡すことによって画定され

るのである。神社などに掲げられる意義がまさしくこれである。神社に行けばごく自然に誰もが拍手を打って頭を下げる。その頭上には大きな注連縄がぶら下がり、いやが上にも厳かさを増すのである。こうした意義で、神社のみならず、巨大な岩や樹木、清浄な井戸、瀧、寺院にも掲げているところもある。現在では、正月、門松とともに戸口に注連飾りを置くのも、上述の意義より家の中に悪霊を入れず、穢れをさり無病息災・家内安全を願ってのことである⁽¹⁷⁾ということは、周知の通りである。

このように、縄からなる中国結はその文化的原点を先史ないし伝説時代に遡って求めることができる。明らかに、それは原始的宗教的には日本の注連縄と同様に、神事の神聖性を保つ表徴として、社会的には明示的規範として中国文明史に登場してきたのであろう。

IV. 中国結の再生

これまで考察した通り、中国結はデザインも色彩も美しい。のみならず、それは文学や言語や宗教や政治などにその伝統的基盤をもち、しかも長年に渡り、変化・発展を遂げてきた。そのため、中国結は文化的沈澱として人々の精神、日々の生活に深く浸透しており、中国人の深層心理構造をなしていたと言ってよかろう。

しかし、一方では、近代西洋の志向で、伝統文化を反動的封建文化として敵視した「共産革命」の時代に、中国結もまた「ブルジョアジーの生活方式」の象徴物として革命の対象とされ生き残れなかった。毛沢東時代には中国結が中国社会から姿を消した。20世紀80年代初期、台湾やシンガポールや欧米社会においては、中国結が広く知られたにもかかわらず、中国大陆においては、中国結は伝承が絶える境地に瀕していた。

他方、清代の中国結は台湾にある台北故宮博物院に収蔵されている。また80年代末頃、台湾漢聲

雑誌社の黄永松、呉美雲、姚孟嘉一行が中国結を全面的に調査するため、南京を訪問し南京芸術学院との交流を実現した。1991年初、『中国民間工芸』編集長張道一、南京芸術学院劉道広博士の推薦により、中国美術学会民間工芸委員会、英文漢聲出版有限公司、漢聲雑誌社が共同して南京城南の老人曹禾姝女史に中国結の制作を依頼した。同年5月、台湾、日本等民間芸人が南京を訪れ、曹女史と交流した⁽¹⁸⁾。

このことは大々的に報道され、曹女史は国内外で著名人となった⁽¹⁹⁾。とはいえ、中国大陆では、中国結を救い出しその姿を再現したのは、老人曹禾姝だったのである⁽²⁰⁾。またこれによって、それまで西洋美術の氾濫を反省し自国の伝統を追求めていた大陸美術界は眼が醒め、速やかに論陣を張った。そのなか、張道一の「中国的繩与結」⁽²¹⁾という論文と李立芳の『繩結芸術』⁽²²⁾という専門書は大陸で中国結の再現を宣告したのである。

V. 人間関係のきずな

現在、中国結は自他を結び合う媒介物として大きな役割を果たしている。携帯ストラップやブレスレットやネックレスは美しくて安いため、老若男女を問わず、だれにでも適する贈り物である。「同心結」は男女間の愛を誓うしるしの贈りものとして中国社会に定着している。「同心結」に香水をつけて恋人に贈るという手もよく使われている。「吉字結」と「盤長結」、そして「魚結」（魚と余とが同音字）とを組合すと、「吉慶有余」、つまり尽きない裕福、繁盛という意味をする。これは個人や団体の何らかの儀式に最適な祝賀用のプレゼントである。「双喜結」は喜びに喜びを重ねるという意味で、結婚式や昇進や進学などのおめでたいときに、人々に愛用されている。「寿字結」は誕生お祝いに用いられる。多くの人はこれをもって親に贈り、親孝行をしている。「桂花結」は高尚優雅さを意味するゆえに、尊敬する人への贈

り物としてもっとも相応しい。「壁鞋結」は「壁鞋」と「避邪」とが同音で「魔よけ」を意味する。それゆえに、赤ちゃん誕生のお祝いや患者のお見舞いにもっとも素敵な品物となっている。

日本においては、安全出産、一族守護、家内安全、病氣平癒、商売繁盛、災害無事、学問成就、受験合格、技芸上達、火雷厄除、交通安全、開運長寿、難病治癒を祈る神事は宗教団体、とりわけ神社によって執り行なわれている。人間はその生存および繁栄に対する希求と、その希求を自己の力で満たし得ないという無力感との矛盾のなかで、宗教に依存し、さまざまな崇拝行為を行うのである。この意味では、中国人も例外ではない。しかし、中国において、人間の宗教的感情は超自然的なものに依存せず、宗教団体という神の代理機構を通さず、儒学的な礼樂的行為、つまり対人的コミュニケーション行為によって解消されたのである。中国結はその功を奏する上で機能している。「平安結」はすべての安全を祈り、「祥雲結」や「吉祥結」は吉祥、瑞祥の意を托しており、「戟結」は学問成就、受験合格、技芸上達といった祈願を総括し、「双銭結」は商売繁盛、生活富裕の意を宿している。要は、中国人は宗教的次元における、他者への思いやりや疎外された第三者、つまり他者化された自己への関心を、神事として神や、その営造物としての神社に依託するのではなくて、中国結という美としての芸術品に託して、善と真（心）を一体化して表現するのである。このような「中国結」は「神霊ノ結」と呼ばれ、宗教にとって代わって自他を結ぶという人倫的意欲を満たす上で大いに貢献している。

中国結の再現は決して偶発的なことではない。むしろ長期化された闘争、とりわけ人為的「階級闘争」、さらにこれに加えた、自己勝手な利害関心にしか従わない非人道的商業競争という西洋的価値・運動・体制という他者の投影で、中国人が自国の伝統文化の中に社会倫理、とくに他者との

結び合いという本来の人間の意識を見出し自覚し認識しようとすることを意味している。この意味で、この時代の要請に即して、このような中国人精神の受け皿として中国結が再現してきたと言ってもよからう。中国結はまさしく一つの鏡のように、他者像と自己像を見出すメカニズムをもつのである。

VI. 神話の復活

このように、中国結は豊かな文化的蘊蓄をもち、純粋な東方的神髄を表出している。中国結は工芸美術、社会倫理、政治、宗教といった幾つかの次元で人々の意欲を満たしている。現在、中国結は人形と刺繍とを並んで、中国の三大手工芸品とされており、中国政府はこれを、「中国民間の絶品」と評している²³。さらに中国結は単なる商品として日本に上陸しただけではない。日本で中国結が製造されており、中国結講座も開かれている。そのなか、製造・販売の企業として神奈川県に「東方美人」があり、三重県に「台湾良品本舗」がある。

また中国結に関する専門書物が数多く出版されている。中国軽工業出版社は2000年5月から9月までの5カ月という短い期間に総力をあげ、前引した『中国結芸——基本結』などの他に、熊大蒂・周巧儀『中国結と軟陶器』、段建華『中国吉祥装飾設計』、邱蔚麗・戴雲亭『繩的芸術』、楊陽『繩結的設計与製作』など等、その他数十種の専門書を続々と出版した。その他に、上海や河南省や浙江省や黒龍江省などの出版社も数多くの専門書を続々と出版したのである。さらに大陸のみならず、海峡をはさむ台湾でも、台湾徳昌手芸行は邱永昌が著わした『古典中国結芸』を出版しており、陳夏生の中国結専門書だけでも5冊も英文漢聲出版有限公司によって発行されている。

明らかに、こうした出版事業は「文化的記憶」、つまり中国結という文化現象の記述である。そこ

には現代中国人の秘かな「純粹文化」への欲求が示されている。そこに露呈されているのは、中国人の心の奥底にある「文化的記憶」の覚醒である。

実は「文化的記憶」だけではなく、図5²⁴⁾のような中国結が2008年北京オリンピックの象徴とされている。これは実に意義深長なのである。

これは「盤長結」の象形で、中国国旗たる五星旗とオリンピックの会旗としての五輪旗、そして太極拳を象徴するものであると解釈されている²⁵⁾。この図案は太極拳をプレイする形をとるがため、古い東方の神韻と中国の伝統体育文化の真髄を表しているのみならず、さらには世界五大州の団結、協調、交流、発展という意味をもち全世界の人々が共同して21世紀を作ろうとする精神をも象徴するものである。言うならば、中国結、とりわけ「盤長結」は2008年北京オリンピックの神聖なるシンボルとして登場してきたのである。

周知のように、スポーツは人々に共感を与えるものである。7月13日に開催される国際オリンピック委員会（IOC）総会を契機とし、中国政府、内外民間団体が大々的に招致キャンペーンを行っている。興味深いのは、2001年7月、モスクワで開催されるIOC総会で、中国代表団が中国結を記念品とし来賓へ贈呈した、ということである。た

いへん好評な様子がテレビに映されていた。当然のように、2008年北京オリンピックの神聖なるシンボルとしての中国結はより頻繁に人々の目に映されている。さらに中国結は衛星放送やインターネットを駆使して、シンボルとして地球村の家々に入り、より多くの人々に共感をもたらしている。実は、中国中央テレビ局は2002年「春節聯歡晚会」でも最も注目される舞台の中心部を中国結で飾り、全世界に向けて発信したのである。こうして、世界中、ますます多くの人々が中国結を話題にしている。中国結は現代中国・中国文化のシンボルとして輝かしい光を放っている。

さらにまた2001年夏、北京を訪問した台湾の小学生が北京の小学生と共同して、中国結をつくった映像が中国中央テレビ局によって放映された。2001年12月18日に江沢民が中国文学芸術界聯会第七次全国代表大会と中国作家協会第六次全国代表大会の席上で「民族精神を高揚する作品の創作に努めよう」²⁶⁾と呼びかけたのち、各新聞は迅速に反応し、一斉に中国結を掲載したのである²⁷⁾。

このように、現在、中国結は台湾の「第一の浪」につぎ、「第二の浪」として中国内外に押し寄せている。その中国結はただの装飾品では決してない。そこには「人倫的」という人類社会のあるべき理念や価値観が濃厚に込められている。さらにそれは龍や獅子などと同じく、中国・中国人を象徴するものとして、広く深く中国人の日常生活に浸透しているがゆえに、中国人意識、とりわけ自己認知の確立に深く係わっていく。これは「文化的アイデンティティ」を求める現れであろう。これと共に、外国人も中国結を媒介にして、より深く広く中国・中国人に興味を持つようになった。中国結は対内的には国民の凝集力を高めながらも、また対外的には「国際化」を促す上で機能していると捉えてよからう。

いずれにせよ、中国結は伝統中国文化を復活させ、再び見える姿で現実のなかで「見えざる」古

図5



代伝説を再現し、中華民族の精神を象徴している。さらにまたそれは幽霊のように、中国という特定の空間を超えて「人は人である所以」という人類史のテーゼを喚起していくのであろう。

VIII. 今後の課題

当然のように、中国結は経済学的ならびに文化人類学的な研究対象になる。それだけではなくて、中国結がもはや中国社会の隅々まで浸透しているという事実を視野に入れるとき、社会学という分野で考察されるべきであるということは自明なのである。またすでに考察したように、中国結は深く政治世界に係わっている。とくに台湾と中国大陸とが中国結を共有しているという文化的現象は意義深長なのである。文化的一体性を基盤にし政治的一体感が求められるとき、中国結は中華人民共和国と中華民国とを統一する絆の一つとなり得る。さらに中国結は中国・中国人を象徴するものとして、中国人のアイデンティティを確立する上で不可欠な役割を果たしている。これは近年台頭してきた中華ナショナリズムと無縁ではなく、むしろ「文化的」という意味において、柔軟かい中華ナショナリズムの一表現形態として捉えるべきではなかろうか。紛れもなく、中国結は21世紀中国社会を読み、その行方を追う重要な指針の一つとなっている。

にもかかわらず、中国においては中国結関係の学術的論文が稀である。日本においても口頭発表のみで活字にはならなかった²⁸⁾。政治学的な考察は今後の課題として時を俟たなければならない。

[注]

- (1) 無署名, Traditional Chinese Culture in Taiwan: Chinese Macrame.

<http://www.houstoncul.org/culdir/macr/macracr.htm>所引
(最終確認2001年5月8日)。

- (2) YQM製作「結百年同心 圻千秋家園」

http://myhome.zaobao.com/home/y/yqmiao/china_knot/appreciation.htm所引 (最終確認2001年5月7日)。

- (3) 陳夏生『中国結 3』「作者序」英文漢聲出版有限公司, 1997年。

- (4) 陳夏生『中国結 3』英文漢聲出版有限公司, 1997年, 18-19頁。その他, 大陸では, 基本結を24種にしている。その詳細について, 鐘芸『中国結芸 (基本結)』(中国輕工業出版社, 2000年)を参照。

- (5) 中国輕工業出版社が2000年に出版した以下の書物を参照。鐘芸『中国結芸 (変化結)』, 張虹虹, 方緒麟『中国結芸 (字結)』, 衛荒, 陳鈴『中国結芸 (服飾結)』, 方緒麟, 劉淑敏『中国結芸 (裝飾結)』, 中国輕工業出版社編集部編著『中国結芸 (盤扣結)』など。

- (6) 無署名「携帯ストラップ」

<http://members.aol.com/mmoneymake/zak15.htm>所引 (最終確認2001年5月7日)。

- (7) 前掲「結百年同心 圻千秋家園」。

- (8) 『隋書』卷三十六・列伝第一。

- (9) 前掲「結百年同心 圻千秋家園」。

- (10) 張道一主編『中国図案大系』1, 山東美術出版社, 1993年, 11, 25頁。

- (11) 『易・系辞』。

- (12) 後漢・応劭『風俗通義』皇霸卷第一。

- (13) 白川静『字統』, 平凡社, 1999年, 460頁。

- (14) 伊藤清司『中国の神話・伝説』(東方書店, 2000年)を参照。

- (15) 宋・李昉『太平御覧』卷第七十八・皇王部三。

- (16) YQM製作「中国結的文化内函」

<http://myhome.zaobao.com/home/y/yqmiao/chinaknot/news/wenhua.htm> (最終確認2001年5月7日)。

- (17) 注連縄研究会 (大友正道)「「しめなわ」とは何か」

marusyo@po.minc.ne.jp/marushyo/itiba/kisetu012a.htm (最終確認2001年6月11日)。

- (18) 俞家道「曹禾妹遥条整理出“中国結”」『南京日報』1990年4月13日。
- (19) 劉道広「甘苦自知的民間芸人曹禾妹」『手打中国結』所収，漢聲雜誌社，1994年。
- (20) 馬以斌「好個“中国結”」『揚子晚報』2000年9月21日。
- (21) 張道一『美術長短録』所収，山東美術出版社，1992年1月。
- (22) 李立芳編著『繩結芸術』湖南科学技術出版社，1998年。
- (23) 前掲「好個“中国結”」。
- (24) 民間工芸網站「北京奥申委会会徽和中国結」
<http://myhome.zaobao.com/home/y/yqmia/o/chinknot/news/aoyun1.htm>所引（最終確認2001年5月7日）。
- (25) 第29届奧運会組委會新聞宣傳部「会徽説明」。
- もしくは
<http://www.beijing-2008.org/xwzx/hhkh/khsm/xwzx-hhkh/khsm.htm>（最終確認2001年12月26日）。
- (26) 江沢民「在中国文聯第七回全国代表大会 中国作協第六回全国代表大会上的講話」『人民日報』2001年12月19日。
- (27) 2001年12月19日の『中国青年報』，『經濟參考報』，『四川日報』，『成都日報』，『每日電訊』や2001年12月20日『人民日報』を参照。
- (28) 東京外国語大学アジアアフリカ言語文化研究所「中国結と台湾結——Chinesenessをめぐる一考察」，国立民族学博物館共同研究「東南アジアにおける社会倫理の人類学的研究」研究会（代表：田村克己）1994.10.21。

社団法人中国研究所・今後の研究会開催予定

2003年度・現代中国公開講座『新段階の中国社会』

日 時：2003年5月31日(土) 13時～16時（12時半開場）

場 所：江戸川区総合区民センター＜タワーホール船堀＞4階研修室

* 都営新宿線・船堀駅下車北口徒歩1分

講師と報告テーマ：「改革・開放政策の新しいステージ」 田中 信行 氏（東京大学教授）
 「胡錦濤の政治と中華本流の復興」 趙 宏偉 氏（法政大学助教授）

会 費：一般 2,000円／中国研究所所員・研究会員および学生・院生 1,000円

定 員：84名（先着順・要事前申込）

現代中国経済研究会 * いずれも中国研究所会議室にて開催，会費1,000円です。

《第7回》日時：5月17日(土) 午後2時～5時

テーマ：中国の対外貿易戦略

報告者：藤村 幸義 氏（拓殖大学教授，元日本経済新聞論説委員）

《第8回》日時：6月7日(土) 午後2時～5時

テーマ：中国の金融問題

報告者：大久保 勲 氏（福山大学教授，元東京リサーチインターナショナル）

《第9回》日時：6月14日(土) 午後2時～5時

テーマ：積極的財政のゆくえ

報告者：田中 修 氏（財務省財務総合政策研究所客員研究員）

現代中国経済研究会は，第9回をもって前期の日程を終了します。

* 各研究会とも，お申込み・お問い合わせは中国研究所事務局まで。